

東奥日報

2022年(令和4年)6月28日(火曜日) (22)

八工大など開発 検体採取ボックス 県内外に売り込みへ



PCR検体採取ボックス「BOXer タイプ2」の
販路拡大について記者発表した関係者＝八戸工業大

青森総合警備が協力

八戸工業大学は27日、地

元企業2社と共同開発した

PCR検体採取ボックス「BOXer (ボクサー)」

について、青森総合警備保

障(青森市)が販路拡大に

協力すると発表した。関係者は、新型コロナウイルス感染症の患者の検査を行う医療機関のみならず、人の往来が多い空港や港湾、観光施設などでの検査でも活用できる点をアピールし「八戸発の製品を県内外へ売り込みたい」と意気込みを語った。

ボクサーを取り扱う会社は、医療事業のコーディネートを手がけるザックス(本社東通村)に続き2社目。

ボクサーは2020年、医師が防護服を着けずに安全に検体採取ができるようにと、八戸市立市民病院の今明秀院長の監修で同大の教員らが中心となり開発。この時完成した初代ボクサー「タイプ1」は現在同病院で活用されている。

その後、金属加工業・大

和エンジニアリングとザックス八戸営業所の同市内2社と同大工学部の浅川拓克准教授が、開業医向けに「タイプ2」を開発し、販売を開始。ウイルスが飛散しないようボックス内を換気装置で陰圧化し、患者を中に隔離しながら検体採取することが可能で、現在同市と三戸郡の医療機関などで19台が導入されている。

ALSOKグループの青森総合警備保障は、陰圧装置など感染対策機器の販売実績があり、グループのネットワークを生かしてまず県内を中心に販路拡大に取り組み、将来的には全国展開も視野に入れる。同社の山谷克史常務取締役は「地域の皆さまに安心安全をお届けするお手伝いがしたい」と語った。

(千葉真由美)

※ 「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」